

H. ホフマンの Der Struwwelpeter (もじゃもじゃペーター) に関する一考察

西岡 万里子*

Eine Betrachtung über den Struwwelpeter von Heinrich Hoffmann

Mariko Nishioka

I 序 論

現在私達の周囲には多種多様な子ども向けの本が出版されているが、ヨーロッパにおいては、16世紀初頭に極く少数のABCの本、しつけ行儀の本、寓話、学校劇、宗教歌、教義問答などが出版されたのが始まりである。これらはいずれも教育のための教材であり、裕福な者の子弟を対象とするものであった¹⁾。

そして17世紀に至り、子どもが大人と区別され独立した存在として認められてから、挿絵入りの、絵本の元になる本が出版され始めた。

1658年に「世界図絵 Orbis<Sensualium> Pictus」が Joh. Amos Comenius (1592~1670) によって書かれたが、それはラテン語と母国語(英、独など)を学ぶためのものであった。

1770年から1774年にかけて Johan Bernhard Basedow (1723~90) によって著された「初等教育 Elementarwerk」には、子どもの遊び、歴史の劇的な場面、数学の公式、天文学の図、ポートの作り方などが絵で示されている²⁾。

また、「子どものための絵本 Bilderbuch für Kinder」が1796年~1822年 Friedrich Justin Bertuch (1747~1822) によって書かれた。各巻は、それぞれ動物、果実、衣装、鉱物、その

他各種の学ぶべきものを、自然、芸術、学問の領域から集めた楽しい絵本の形を成しているが、これらも挿絵入りの教科書であり、百科辞典であった³⁾。

こうした背景の中で、最初の絵本とされるハイリッヒ・ホフマン(Dr. Heinrich Hoffmann, 1809~94)の「もじゃもじゃペーター Der Struwwelpeter」が1845年に出版された。この本はグリム兄弟の「子どもと家庭のための民話集 Kinder-und Hausmärchen」とともに多くの子ども達に愛読されている。

本稿ではこのホフマンの絵本を取り上げ、その内容を心理学的な観点から考察してみたい。

II 本 論

(1) ハイリッヒ・ホフマンについての概観

彼は1809年6月13日にフランクフルトで生まれ、ドイツ各地やパリで医学を専攻し、開業医になった。1851年に精神病院の院長になり、1888年に退職するまで精神医学的な治療法の改良や病棟の新築に力を注いだ。一方で彼は、詩作や哲学と政治に関する文筆活動をしており、子ども向けの著作としては「もじゃもじゃペーター」の他に、「くるみ割りの王様と哀れなラインホルト König Nußknacker und der arme Reinhold」(1851)、「なまけ者のバスティアン

* 本学助手 外国語

Bastian der Faulpelz(1854), 「天と地と Im Himmel und auf der Erde」(1857), 「グリュエネヴァルト王子とろばを連れたベルレンファイン Prinz Grünwald und Perlen fein mit ihrem lieben Eselein」(1871) が出版されている⁴⁾。

彼は、「子どもの本というのは、外見は堅牢でなくてはならないが、本のページは必ずしも堅牢でなくともよい。子どもの本は、見たり、読んだりするためだけでなく、破かれるためにある。それは、子どもの成長過程である⁵⁾」と提唱しており、「もじゃもじゃペーター」以外の作品は、事実そのとおりになり、消失したり、忘れられたりしてしまったものもある。

(2) もじゃもじゃペーターの成立

ホフマンは35歳の時、4歳の息子のクリスマスプレゼントに絵本を探した。しかし、どの絵本もきれいな表現で美しく彩色されたお伽噺、物語、インディアンや泥棒の場面であった。またフォリオ版の挿絵は、馬、犬、鳥、机、椅子、鍋等が、全て正確に形を幾種類かに縮小してあるだけで、子ども達は描いてあるその絵を見て、その絵で何をどう対処したらいいのか、教化的意味が欠けていることと、絵のイメージが子ども達に喚起するものが不足している点で、ホフマンの意に添わなかった⁶⁾。

そこで彼は白紙のノートを購入し、自分が今までに診察の際に、むずかる子ども達に描いておとなしくさせていた絵を、自分の息子カールに書き写して与えてみた。カールはそれを見て大変喜んだので、気を良くしたホフマンは親類知人にそれを披露した。周囲から出版することを勧められたが、初め彼にはその意志はなかった。しかし重なる勧めがあったことや、また、1843年に風刺詩を出版したが、それが売れなくて借金を抱えていたこともあり、この絵本の出版で80グルデン入手できることは大きな魅力であったので、その本の出版を決意した⁷⁾。

初版は、1845年にレーニッヒ・リュッテン社(Lönig und Rütten) から「3歳から6歳までの子ども達のための美しく彩色された15枚の挿絵つきのたのしいお話とおもしろい絵 Lustige

Geschichten und drollige Bilder mit 15 schön kolorierten Tafeln für Kinder von 3 bis 6 Jahren」という題で出版されたが、その際に

Das alles fein malte und beschrieb

Der lustige Reimerich Kinderlieb

(この全てのすばらしい絵を描きお話を書いたのは愉快的ライメリッヒ・キンダリープ《子どものすきなへボ詩人》です) がペンネーム代わりに用いられた⁸⁾。

作品は次の順序で収録されている。

- 「悪いフリーデリッヒのお話」
(Die Geschichte vom bösen Friederich)
- 「黒んぼの子のお話」
(Die Geschichte von den Schwarzen Buben)
- 「乱暴な狩人のお話」
(Die Geschichte vom wilden Jäger)
- 「スープカスパーのお話」
(Die Geschichte vom Suppen-Kaspar)
- 「親指しゃぶりの子のお話」
(Die Geschichte vom Daumenlutscher)
- 「もじゃもじゃペーター」
(Der Struwelpeter)

この初版は1,500部全部が4週間で売り切れたが、それは当時前例のないことであった⁹⁾。

1846年、第Ⅱ版でペンネームに半分本名が入り、Heinrich Kinderliebとなり、次の二編が付け加えられた。

- 「火遊びのとっても悲しいお話」
(Die gar traurige Geschichte mit dem Feuerzeug)
- 「ジタバタフィリップのお話」
(Die Geschichte vom Zappel-Philipp)

1846年、第Ⅲ版で初めて「Der Struwelpeter」が表題として用いられた。

1847年、第Ⅴ版で本名のDr. Heinrich Hoffmannが明記され、さらに二編が加わった。

- 「ぼんやりハンスのお話」
(Die Geschichte vom Hanns Guck-in-die-Luft)
- 「空飛ぶローベルトのお話」

(Die Geschichte vom fliegenden Robert)

そしてこの第V版で次のような順序に再編集された。

- 1 Der Struwwelpeter
- 2 Die Geschichte vom bösen Friederich
- 3 Die gar traurige Geschichte mit dem Feuerzeug
- 4 Die Geschichte von den schwarzen Buben
- 5 Die Geschichte vom wilden Jäger
- 6 Die Geschichte vom Daumenlutscher
- 7 Die Geschichte vom Suppen-Kaspar
- 8 Die Geschichte vom Zappel-Philipp
- 9 Die Geschichte vom Hanns Guck-in-die-Luft
- 10 Die Geschichte vom fliegenden Robert

1858年にこの絵本は、石版から大量印刷が可能なる木版に描き移される際に、挿絵がホフマン自身の元絵から版職人の絵に描き直され、詩は「悪いフリードリッヒのお話」で二箇所■行が加筆された。現在も流布しているのはこの版である¹⁰⁾。

挿絵からは、服装、家庭の様子——寝室にある“おまる”，室内に置かれた木の鉢植，食事の際のナプキン着用，そして核家族化した登場人物——などビーダーマイヤー時代（1815年～48年）の特色を見ることができ、また、各々の絵には子どもの成長過程と関連した象徴的意味が示唆されている。

(3) しつけとイニシエーション

この絵本は、V版で二編が追加され、再構成されたことで、しつけとともに「イニシエーション」を象徴的に表わす絵本になったと思われる。

発達心理学において、成長過程の段階区分は学者によってまちまちであるが、E. H. エリクソンは人間の生涯を下記の八段階に区分している¹¹⁾。

- 1) 乳児期 0～1歳
- 2) 幼児前期 1～3歳
- 3) 幼児後期 3～6歳
- 4) 児童期 6～12歳

- 5) 青年期 12～20歳
- 6) 成人前期 20～30歳
- 7) 成人中期 30～65歳
- 8) 成人後期 65～歳

人間は3歳以前は親の援助がなければ意志の遂行が不可能であるが、3歳から6歳の時期は、言語・運動・想像の諸能力が発達し、自分の意志どおりに行動できるようになる。またこの時期は、人生において心身ともに活動の基礎が形成される時であり、それまでの日常生活に必要な生活習慣の「しつけ」の他に社会的行動の「しつけ」もなされなければならない。そしてこの時期は第一次反抗期でもあり、親の態度が過保護であったり、厳格すぎたりしがちであるが、その後の発達に悪影響を与えないような処し方が大切である。そして人間の成長は、各段階過程の順序を漸進的に通過し、「個」として形成されていくことが望ましいとされる。この絵本は、その点において好材料を与えている。

イニシエーション (Initiation) とは従来の社会状況から他の新たな社会状況への加入参加をするための所定の手続きをふむ一連の行為を意味する。しかし、この手続きの形態は社会によって多様であり、一般には儀礼もしくは儀式のかたちをとる¹²⁾。この絵本の各話の結末が怪我や死で表わされているのも、古い態度が消え、それにかわる新しいものが再生される一種の儀式と捉えることができ、次の児童期の段階へ進むまでに各々の経験を経て変容しなければならないことを意味する。

(4) 各話の心理学的意味

以下、C. G. ユングの心理学を手がかりに、個々の話についてその心理学的意味を考察してみたい。

各々の話の概説を「イ」、しつけの意味を「ロ」、心理学的意味を「ハ」として表示する。

図の絵本は左側にV版の複製版、右側に1585年に改版され現在に至るものを並列。

表紙 図①

前書き 図②

「もじゃもじゃペーター」図③

Der Struwwelpeter

- イ ここに立っている子は、両手の爪を一年間も切らせないし、髪も梳かせないの
で、誰もが汚らしい「もじゃもじゃペ
ーター」だと言う。
- ロ 清潔にしろさい！
- ハ 幼児前期から後期へ上昇できて、「英雄」
となった象徴である。しかし、神話の英
雄初期のトリックスターにあたり、自分
の欲求を満足させるだけで、目的意識も
なく狂暴で不道徳である。
後続の話の種々の行為で各々の代償を受
けるが、それはある物事を克服し、精神
的に生まれ変わること、「再生」を意味
している。児童期への移行を容易にした
いと思う一面と不安な一面を表わして
おり、もじゃもじゃペーターは先導的役割
を示すもので、V版で巻頭になった意味
がここにあると考えられる。

「悪いフリードリッヒのお話」図④

Die Geschichte vom bösen Friederich

- イ 乱暴なフリードリッヒは、ハエの羽をむ
しり、猫をいじめ、女の子までムチでぶ
つ。そのうえ犬を追いかけてぶつので、
犬に足をかまれ、■が出てとても痛い
泣き叫び、ベッドで医者から苦い薬を飲
まされる。犬はムチに注意を払いなが
ら、フリードリッヒのテーブルで食事を
楽しむ。
- ロ 周囲のものをいじめたり、乱暴な行動は
やめなさい！
- ハ 「トリックスター」が活発化したので、
忠実な友(犬)からかまれることで啓示
を受ける。そして医者に診てもらうこと
は、トリックスターの凶暴性の浄化を意
味し、ベッドで寝ていなければならない
ことは、次の段階への移行はまだ時期尚
早であることを意味する。

「火遊びのとっても悲しいお話」図⑤

Die gar traurige Geschichte mit dem

Feuerzeug

- イ ひとりで留守番をしていたパオリちゃん
は、きれいなマッチ箱を見つけ、2匹の
猫が止めるのもきかず、マッチをすつて
しまう。とうとうエプロンが燃え出し、
跡には一山の灰と燃えなかった靴だけが
残り、猫が悲しんで泣いている。
- ロ マッチ遊びは危い！
- ハ 両親の影である猫が止めるのも聞かず、
生命の本質の火を興味本位に安易にいた
ずらしてしまった。焼け残った靴は、熟
慮できるようになるための、成長過程の
旅、すなわち様々な経験を経なければなら
ないことを、また、灰は熟成した時の
再生のための生命を象徴している。泣い
ている猫は早期再生を願う親の象徴的心
理である。

「黒んぼの子のお話」図⑥

Die Geschichte von den Schwarzen Buben

- イ 3人の男の子が、黒人の子どもを“黒ん
ぼ”とはやしたてる。それをニコラス様
が止めるが、言うことを聞かないので、
インクつぼの中に3人を浸けて、黒んぼ
よりももっと黒くしてしまう。
- ロ 人種差別をしてはいけない！
- ハ 保護を必要とする者(日傘をさした黒人
少年)に対しての残酷な行為に怒った神
(ニコラス様)が、インクで悔悛の洗礼
を施し、相手の立場をよく理解させ、再
生を促す。

「乱暴な狩人のお話」図⑦

Die Geschichte vom wilden Jäger

- イ 乱暴な狩人が緑色の新しい服を着て、う
さぎ狩りに出かけていき、途中一休みで
寝込んだ所へうさぎが来て、メガネと鉄
砲を奪ってしまい、反対に狩人を狙う。
狩人は危ういところで井戸の中へ飛び込
み、弾は狩人のおかみさんの飲んでい
たコーヒーカップに命中し、そばでその光
景を見ていた子うさぎの鼻には、熱いコ
ーヒーがひっかかった。

- ロ 気を許すと危いめに会うから気をつけなさい!
- ハ 自分の行動は何らかの形でまた自分に帰帰するから、自分をしっかり見つめなければならない。この話では、他者を傷つけるという主題が表われていない。これはつまり、トリックスターの段階から少し上昇、変容した姿であり、さらに変容

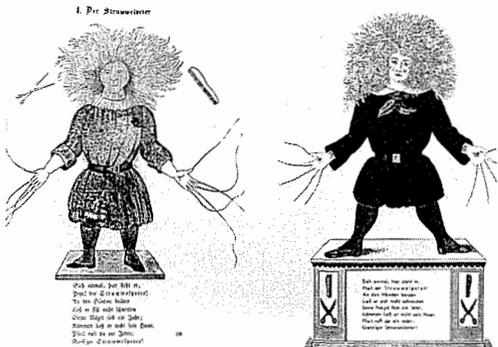
図1 表紙



図2 前書き



図3 もじゃもじゃペーター



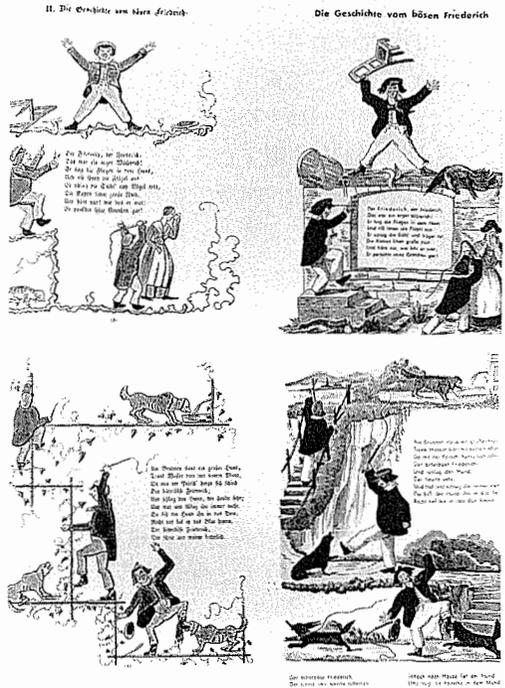
するために、井戸に自から飛び込むことによって洗礼を受け、上昇への導きを受けることを象徴する。

「親指しゃぶりの子のお話」図⑧

Die Geschichte vom Daumenlutscher

- イ 母親が外出の際、留守番の子どもに、親指をしゃぶると、洋服屋が来て指を切ってしまうから、絶対に指しゃぶりをしてはいけない、と言いつける。しかし、母親が出かけるとすぐにしゃぶり始める。早速洋服屋が飛んで来て、大きなハ

図4 悪いフリードリッヒのお話



サミで切っけてしまい、母親が帰宅した時は両手の親指をなくして、しょぼんと立っていた。

- ロ 親指しゃぶりはやめなさい!
- ハ 母性的意識からの脱却を表わす。今まで母親に全てを依存し、親指をしゃぶることで欲求不満を解消していた段階の終りで、次の段階への変容のためには、親指の切断という儀式を経なければならぬことを象徴する。

「スープカスパーのお話」 図⑨

Die Geschichte vom Suppen-Kaspar

- イ 丈夫でまるまるしていたカスパーは、スープを飲まないと言い出し、日毎にやせて5日めに死んでしまった。
- ロ きちんと食事を取りなさい。好き嫌いはやめなさい!
- ハ スープを飲まないと言い出したことは、母親の全面的な援助に対する拒否であり、母性への依存の意識から父性意識へ

図6 黒んぼの子のお話

IV. Die Geschichte von den schwarzen Buben.

Die Geschichte von den schwarzen Buben

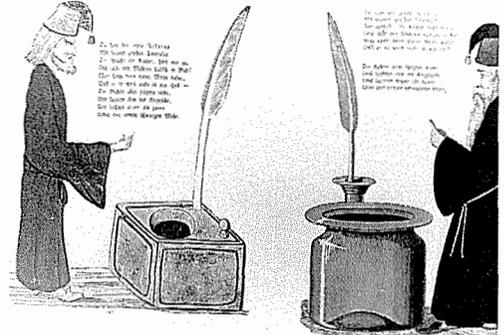
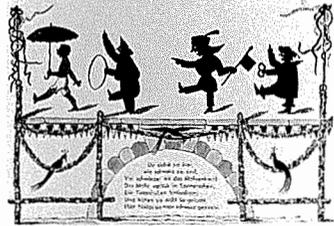


図5 火遊びのとっても悲しいお話

III. Die gar traurige Geschichte mit dem Feuerzeug

Die gar traurige Geschichte mit dem Feuerzeug



の変容の段階に達しようとしている。5日めに死んでしまったが、5という数は、誕生、成人式、完成、休息、死を象徴する。

「ジタバタフィリップのお話」図⑩

Die Geschichte vom Zappel-Philipp

イ フィリップは父親から食事の時、「今日は行儀よく食事ができるかな?」と言われるが、椅子を前後に揺らして倒れそうになり、テーブルクロスをつかんでしまう。クロスとその上の食物が全部床に落

ちてしまい、食べるものがなくなってしまった。

- ロ 食事の時は行儀よくしなさい!
- ハ 父親から「行儀よく食事ができるか」と声をかけられることによって、父性的意識への加入を促されるが、食べ物が床に落ちてしまい、食べられなかったことは、まだ現段階では食べられる状態ではない、つまり消化できる段階に達していないが、その域に早く到達しなければなら

図8 親指しゃぶりの子のお話

図7 乱暴な狩人のお話

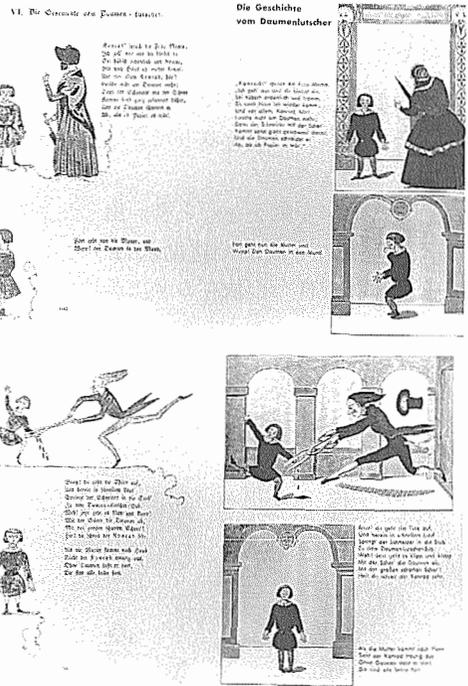
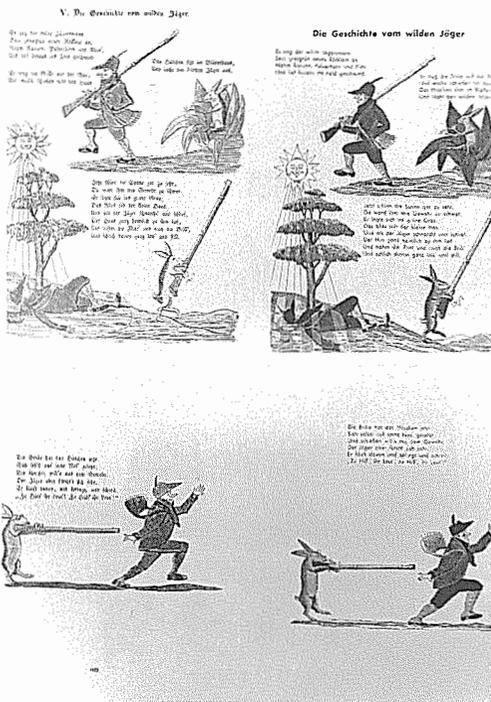
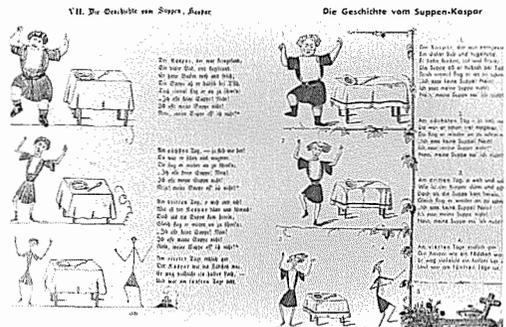
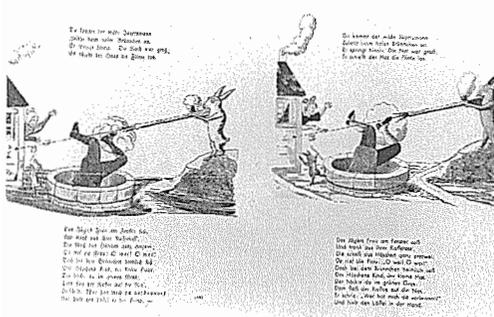


図9 スープカスパーのお話



らないことを象徴する。

「ぼんやりハンスのお話」 図⑩

Die Geschichte vom Hanns Guck-in-die-Luft

イ ハンスは、いつも上ばかり見て歩いている。近づいてくる犬にも気づかずに、ぶつかって転んでしまう。それでもまた上空を見て歩き出し、川に落ちてしまう。運よく二人の男性に助けてもらうが、カバンは流れていってしまった。

ロ 外を歩く時はよく周囲に注意なさい！

図11 ぼんやりハンスのお話



図10 ジタバタフィリップのお話

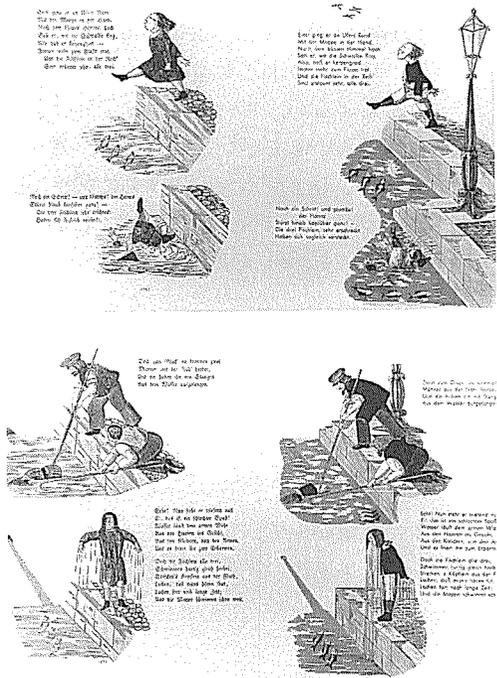
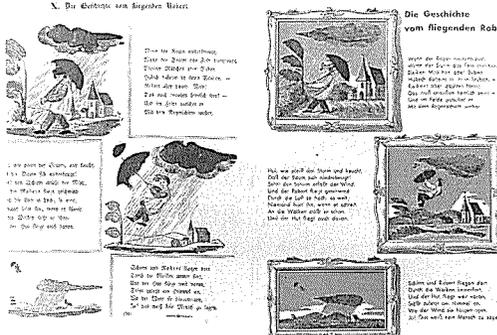


図12 空を飛ぶローベルトのお話



ハ ぼんやりして上空を見つめることは、つまり内面を見つめ無意識を意識化している段階で、さらに犬にぶつかることによって、そのことが一層明確に啓示される。また、川に落ちることで洗礼の儀式を受ける。そして男の人が来て助けてくれたことは、父性的意識に導かれることを、またカバンが流れてしまったことは、過去の行為への決別ができ、次の段階への入門の準備が整いつつあることを意味する。

「空を飛ぶローベルトのお話」図⑫

Die Geschichte vom fliegenden Robert

イ 嵐の時、他の子ども達は家でおとなしく遊んでいるが、ローベルトは、外はきつと素晴らしいにちがいないと思い、外へ出て傘をさして遊んでいるうちに強風が吹き、空高くローベルトを運んでしまう。彼がどこに行くのかは誰にもわからない。

ロ 天気の良い時は家の中で遊びなさい!

ハ 未知への興味と飛翔への憧れとこの段階の成熟が達成される形で登場する。前話、「ぼんやりハンスのお話」の気持ちの高揚を受けて、ローベルトは嵐と雨の浄化作用の中で、神の助け（傘で空を飛ぶ）により次の児童期の段階へ無事出発できた。

III 結 論

以上見てきたように、ホフマンの「もじゃもじゃペーター」は、幼児向けの絵本であるから、簡潔な日常会話の詩句が用いられ、全編に渡り韻を踏み、リズムカルで分かりやすく、覚えやすく構成されている。そして親が子に対する愛情から、こうあってほしいという願いを、観念的な言葉ではなく、象徴的で滑稽な絵によって、こうしたらこうなるという因果関係を明確に描写しているのだから、子どもにとって納得しやすい。

各話がかかなり残酷な結末に終わっているが、ホフマンは子ども達の姿をユーモラスに描くことによって、この時期におけるそれぞれの行為を一面で肯定し、さらにこれらの種々の経験をとおして、自分や他人に対する愛を授け、心豊かに成長できるようにと望んでいる。

この絵本は、いつの時代にも人間が誕生し成長する過程で必ず通過しなければならない経験——イニシエーション——を扱っており、作品中の話や絵は子どもにとっては、現在の生活事象そのままの描写であり、大人にとっても、自分の子どものしつけの助けとなるとともに、自分の成長過程での最良の時期への懐古の念を呼び戻すものとなっている。この事がこの絵本が現在に至るまで愛読され続けている主な理由であろう。

フロイトやユングは、36歳の時に人生の危機を感じ、その転換期に、自分達の子ども時代の生活を思い出し、その遊びをとおして危機を乗り越えることができた。つまり、子どもの頃の豊かな想像力を取り戻すことによって、自分自身の無意識の根源や、奥深い所で光り輝く魂の存在を自覚することができた。

ホフマンも彼等と同じ精神科医であり、この絵本ができたのは35歳の時であった。子どもの患者をなだめるために書き留めてあったものを、息子に絵本を与える動機で編集した「もじゃもじゃペーター」は、或る意味では作者自身のイニシエーションへの回帰の契機となり、「個」の救済——再生への指標となったのかも知れない。

引用文献

- 1) ハインツ・ヴェーゲハウプト「ドイツ国立図書館における児童図書収集の歴史」、『複製世界の絵本館 ベルリン・コレクション解説』ほるぶ社、1983、5頁
- 2) ベットィーナ・ヒューリマン著 野村滋訳、『子どもの本の世界/300年の歩み』1981、福音館書店、93頁
- 3) 同上 95頁
- 4) Klaus Doderer, Helmut Müller *Das Bilder*

Buch, BELTZ, 1973, S. 148

- 5) ベルリン・コレクション解説, 57頁
- 6) *Das Bilder Buch*, S. 141
- 7) *Ibid.*, S. 142
- 8) *Ibid.*, S. 143
- 9) *Ibid.*, S. 144
- 10) *Ibid.*, S. 146
- 11) 小口忠彦, 『人間の発達過程 ライフ・サイクルの心理』, 明治図書, 1983, 18頁
- 12) アルノルド・ヴァレ・ジェネップ著 秋山さと子他訳, 『通過儀礼』, 思索社, 1985, 訳注24頁

参 考 文 献

- C. G. ユング他著, 河合隼雄監訳, 『人間と象徴』上巻, 河出書房新社, 1984
- 秋山さと子, 『ユング心理学からみた子どもの深層』 海鳴社, 1984
- 樋口和彦, 『ユング心理学の世界』, 創元社, 1984
- 馬場謙一他編, 『子どもの深層』, 有斐閣, 1984
- C. G. ユング著, 野村美紀子訳, 『変容の象徴』, 築摩書房
- 秋山さと子編, 『ユングの象徴論』, 思索社, 1981
- 江藤泰二, 『世界の子どもの歴史5』, 第一法規出版株式会社, 1984
- 浅井邦二他, 『図説心理学入門』, 実務教育出版, 1979
- オットー・ボルスト著, 永野藤夫他共訳, 『中世ヨーロッパ生活誌2』, 白水社, 1985
- 『平凡社大百科辞典』, 平凡社, 1958
- アト・ドフリース著, 山下圭一郎他共訳 『イメージ・シンボル事典』, 大修館, 1984
- J. ヘンダーソン著, 河合隼雄, 浪花博訳, 『夢と神話の世界』, 新泉社, 1985
- 秋山さと子, 『子どもの情景』, 大和書房, 1985
- アンドレ・バラニャック, ショロー・ヴァラニャック著, 蔵持不三也訳 『ヨーロッパの庶民生活と伝承』, 白水社, 1980
- 秋山さと子, 『ユングの心理学』, 講談社現代新書, 1982